2016/10/22
唯物論研究協会 研究大会 環境思想部会
布施 元

脱近代について考える

１．将来社会を指し示す脱近代の視座

- 脱近代を考えるヒント――現代をどう捉えるか

「一般に危機において人々は歴史を大きく二分する。破局に至るまでの現在と、破局を乗りこえて成立するであろうし成立させるべき将来社会と。こうした歴史を二分化する発想は、しばしば歴史を、機械的に現在までの歴史と未来に分ける単なるユートピアの設定に、あるいはユートピアによる歴史の裁断という、それだけでは不生産的、非科学的な発想に終りやすい。しかし、ユートピアの設定そのものが不生産的なのではなく、また、それぞれに個性をもったさまざまの時代を一括して歴史時代とし、将来社会と対立させる歴史の二分化的発想が、そのまま非科学的であるとは断じがたい。それはわれわれを、われわれ自身気づかずに埋もれているところの『過去の連続としての現代』から救い出し将来を指し示すことによって、あらためて現代を現代として認識させる新鮮な視座を提供し、科学的分析に方向づけを与える。」（内田義彦（1992）「自然と人間――社会科学から」『作品としての社会科学』岩波書店、157 頁）

→ 歴史の結果と、将来社会への萌芽を、現代に見出す。

- 脱近代の特徴

  - ✓ 現代を、歴史の結果として、また、将来社会の分岐点として、そして、（歴史の単純な延長とは別の）積極的な選択肢が模索される萌芽として捉える。
  - ✓ 近代という歴史的に特殊な時代における決定的な問題性を、直接的な基点あるいは契機として位置付ける。
  - ✓ 近代のみを単純に否定するのではなく、また前近代を短絡的に肯定するのでもなく、近代と前近代を、現代までの歴史として総括し批判する。

２．脱近代の社会構想における主軸としての〈共〉

● 〈公〉〈共〉〈私〉の思考枠組

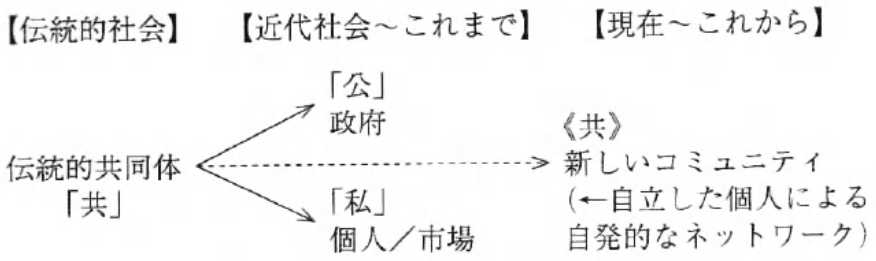


図 IV-3　個人・コミュニティ・公共性

出典）　広井（2001）

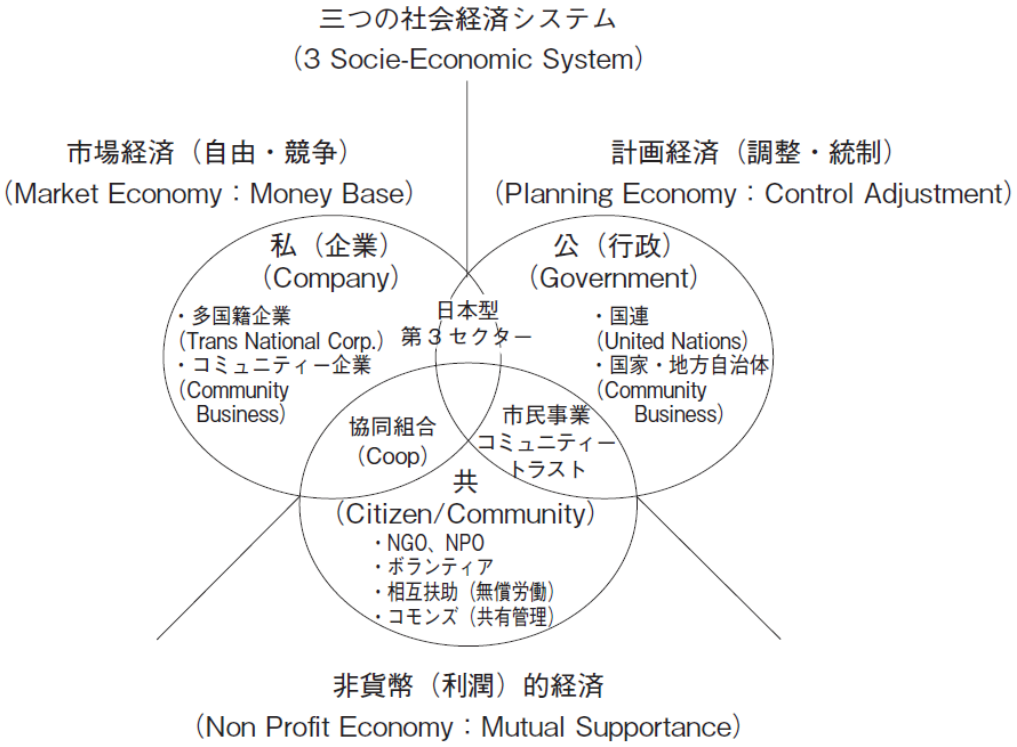
「伝統的な社会において存在していた、農村社会の相互扶助に象徴されるような『(伝統的な）共同体」は、近代以降において一方における『市場／個人』と他方においてそれを補完する『政府』＝公共部門に二極化し、各々がそれぞれ『私』と『公』という領域に対応するものとなった。しかし現在、こうした枠組みに収まらない様々なかたちの新しい試みが生れている。それがすなわち個人による自発的な（ボランタリーな）コミュニティ＝『新しいコミュニティ』づくりに向けた様々な活動や試みである。……ここでいう『伝統的共同体』とは基本的に自然発生的なもので、そこへの帰属は個人の自発的な意思によるものではなく、またしばしばそこからの“離脱”は困難が伴う。これに対して『新しいコミュニティ』＝《共》は、自立的な個人が自発的に創ったり参加していくもので、各メンバーは共通の関心や理念あるいは連帯の意識で結びついている。」(広井良典（2001)『定常型社会――新しい「豊かさ」の構想』岩波新書)

「(a）……『私』(市場）とも『公』(政府）とも異なる、いわば『新しいコミュニティ』とも呼びうるような新たな『共』の領域が展開していく。(b）一方でこの領域は、“新たな公共性（あるいは市民的公共性）の担い手”として、それまで政府が担っていた役割の一部を代替していく。(c) 同時に他方では、市場経済の主体であった企業もまた、『営利と非営利の連続化』という現象や、いわゆる企業の社会的責任等といった文脈も含むかたちで、部分的に『共』の領域がクロス・オーバーしていく」(広井良典（2009)『コミュニティを問いなおす――つながり・都市・日本社会の未来』ちくま新書)。

→　従来の（近代の）社会の存立形態は、〈公〉と〈私〉を両輪とするとともに、前近代から続く〈共〉を縮減・解体しつづけ、その結果、現代において極限状態（近代の行き詰まり）に達し、種々の問題群を発生させてきた。そのような状態と傾向を克服するべく、〈公〉と〈私〉とは質的に異なる〈共〉の潜在性と可能性を契機とする、新たな（脱近代的な）社会のあり方が追求され模索されている。

- ✓ 近代の消極面としての〈公〉〈私〉二極化 … 現代（近代）の消極面①
- ✓ その反動としての前近代（伝統的共同体）へ単純な回帰 … 現代（前近代）の消極面②
- ✓ 新たな〈共〉（共同体）… 現代の積極面（脱近代）①

● 近代の積極面としての〈共〉（公共圏）



出典）　古沢（2007）

「新たな社会経済システムの再編が『3 つのセクター』のバランス形成、『私』『公』『共』の 3 つの社会経済セクターの混合的・相互共創的な発展形態として展望できると思われる。……とくに第 1 の市場メカニズム（自由・競争）を基にした『私』セクターや、第 2 の計画メカニズム（統制・管理）を基にした『公』セクターに対して、第 3 のシステムを特徴づける協同的メカニズム（自治・参加）を基にした『共』セクターの展開こそが大きな鍵をにぎると思われる。……『共』セクターについては、歴史的には村落共同体がもつ入会地ないし共有地（財産）の維持・管理や、結いと呼ばれる労働力の交換方法、そして都市化社会でもさまざまな市民団体のボランティア的活動や社会的運動・事業団体（NGO・NPO）の活動がある。経済行為としては共同購入グループの活動から生協や農協など既存の協同組合における活動、その他利潤目的ではないコミュニティや社会的な事業、福祉サービスなど、実にさまざまな分野に広がっている」（古沢広祐（2007）「共生社会システムへの道――持続可能な社会の形成」共生社会システム学会編『共生社会システム研究』（Vol.1、No.1））。

→　共同体以外の多様な〈共〉の現実性と可能性。個人の自発性は、共同体に収まらない。

→　〈共〉は、共同体の他に、市民の自発的で協同的な運動・組織（NGO・NPO、協同組合、ボランティア活動など）によって多様に構成される“公共圏”としても現象する。公共圏は、近代の自立した個人によるアソシエーションを特徴とする。

✓　近代の積極面としての〈共〉（公共圏）… 現代の積極面（脱近代）②

- 〈共〉（公共圏）の意義

  - 共同体の存続・再興。〈私〉と〈公〉の圧力への対抗。
  - 排他性・閉鎖性や拘束性・従属性といった共同体に伏在する問題性の克服。
  - 共同体に収まらない、人間の多様で多面的な可能性の開花。